

歴史は未来の羅針盤

温故知新

今回は、近江日野商人館からお届けします。日野商人館では、創立三十周年記念の企画展用の資料として、明治時代から戦前までの日野地方の町や村の様子を写した写真や絵はがきを探しています。ご協力いただける方は、日野商人館までご連絡ください。

近江日野商人館 「お陰様で三十年」

昭和五十六（一九八一）年、「びわこ国体」秋期大会が開かれる十日前の十月三日、日野商人館（日野町歴史民俗資料館）は開館しました。

日野商人館の建物は、元は日野商人の山中兵右衛門家の本宅家族の生活の場で、山中家が町立資料館に活用していただきたいと寄贈されたものです。

山中家は、代表的な日野商人の家柄で、三百年前の江戸時代中期から現在に至るまで商いを継続されているという世界的にも非常に稀な老舗です。

寄贈された敷地面積は二千百㎡（七百坪）。木造二階建、瓦葺、建築面積二百八十㎡の典型的な日野商人の本宅ですが、この建物は、昭和十一年に新築された建物で、「お助け普請」の建物として広く知られています。



▲開館式でのテープカット

「お助け普請」とは、深刻な不況下において、仕事の無い人々に仕事を提供することを目的として建築される建物のことです。日野商人や近江商人は、江戸時代以来、商いで得た収入を、世のため人のために積極的に生かすという陰徳善事の心を大切にしてきました。「お助け普請」で建てられた建物は、現在の滋賀県においては、日野商人館と豊会館（豊郷町の旧藤野家）のわずか二軒しかないという全国的にも貴重な建物です。

昔から「八幡表に日野裏」と言われるように、日野商人の本宅は、表を飾るのではなく、奥まった所にお金をかける伝統がありました。山中家の本宅も、内部にはケヤキや屋久杉、黒柿、桐、タガヤサシ、柱の四面とも柂目の杉材など、多くの銘木がふんだんに使用され、戦前の建物でありながら、バリアフリーや水洗トイレが取り入れられ、水道完備などというハイカラな建物なのです。そのため、平成十二（一九九八）年一月に国の登録文化財に指定されました。

このようなすばらしい建物を生かして資料館としている所は少なく、三十年の間、入館者の多くの方々から建物の立派さに驚きの声が上がりが続けてきました。建物の立派さや進取性に加えて、過去三十年間に、また資料館としての役割や展示物の充実にも努めてきました。日野商人館では、日野商人の不明部分の歴史や商法を解明し、今や、日野商人こそが近江商人の本流であると自負できるようにになりました。

「お陰様で三十年」。皆さんに支えられての三十年間に、日野商人館は大きく変わりました。その様子を知っていただくため、感謝の思いを込めてさまざまな記念事業を計画しています。

記念事業期間・十月十五日（十一月六日）期間中全入館者無料

- ① 「三十年間の歩み展」
 - ② 「日野商人新発見歴史講座」
 - ③ 「折形教室」と「お茶席」
 - ④ 「日野町のレトロ写真展」
 - ⑤ 「旧山中家の建物見学会」
 - ⑥ 「日野商人現地見学会」など。
- 詳しくは、十月初旬の新聞折り込みをご覧ください。



▲開館を伝える当時の新聞